

日本地名と「地元放送局アクセント」

～積年の課題に解を求めて～

メディア研究部 井上裕之

NHKアクセント辞典の改訂作業では、アナウンサーからかねてより要望の高かった「日本地名」を本編に載せることを柱の1つとし、3,000余りの地名の掲載を目指した。全国にある都道府県や市の名前はすべて載せ、このほか、放送に頻出する地名を選び出した。アクセント情報は、NHKの旧アクセント辞典や他のアクセント辞典だけでなく、全国にあるNHKの各放送局にアンケートを実施し、地元の地名を実際にどう読んでいるかも調査して、集めた。旧辞典に掲載されていて新辞典にも掲載することになった日本地名は875あったが、本改訂では、このうち32の地名で、第1アクセントを変更した。また、調査で地元放送局から寄せられたアクセントが、より全国的なアクセントと対立した場合は、新たに導入した「地元放送局アクセント」として採用することもあった。地元放送局アクセントとは、当該の地名があるNHKの地元放送局が、全国放送および地域放送の双方で、その地名を読むときに、主に使うアクセントの意味で、今回は76の地名で採用した。市名が「～市」と複合する場合のアクセントは、基本的には[○○\シ]のように、「市」の1つ前の拍にアクセントを置いたが、そこに特殊拍がある場合は、さらに1つ前の拍にアクセントが移るケースもあり、これについてはある程度の決まりごとを設けた。日本百名山の山名は、語形にゆれがあるものがあり、インターネットのサイトや書籍の資料を参考にして決めていった。

はじめに

地名は、日々の放送に頻繁に登場する。例えばニュースの中には、たいていはどこかの地名が出てくるものだ。アナウンサーが、都道府県名や市町村名を一度も口にしない日は、おそらくないだろう。

しかし、知らない土地の名前をどのようなアクセントで読めばいいのか、これは難しい場合がある。辞書を引こうにも、地名のアクセントを多数示したものは必ずしも多くない。また、仮にその土地の名前を見聞きして知っていたとしても、そのアクセントが放送で使うのに妥当なものかどうかを確認することが、また難しい。地名は固有名詞であり、その土地の地元で親しまれているアクセントがあるからである。これが、地名アクセントの難しい点である。

今回のNHK日本語発音アクセント新辞典(以下、『新辞典』)への改訂では、地名(特に日本地名)のアクセントを積極的に本編に載せることを試みた。本稿では、どのような地名を選び、どのようにアクセントを付けていったのかといった、地名掲載に向けた作業について報告する。

1. 地名アクセントに対する高い要望

今回の改訂に向けては、「アクセントの見直しが必要と思われる語を調べること」を目指し、2008年にNHKの全国のアナウンサー約500人に対して、アンケート調査を実施した。この調査について報告した坂本充(2009)では、地名の地元アクセントへの要望が多かったことが、具体的に以下のように記されている。

- * 地名の地元アクセントのクレームがくるものを是非。姫路・彦根・池田・キタ・ミナミ等。(大阪局)
- * 地元アクセントと全国の人が読んでいるアクセントの違いがある場合どうしたらいいのか、かなり迷います。(アナウンス室)
- * 地元アクセントについては許容として載せてほしい。(さいたま局)
- * 地名は地元のアクセントにあわせるべきか、共通語のアクセントで放送するべきか判断に迷うことが多いです。(徳島局)
(坂本充 (2009) より)

ここからは、アナウンサーが日本地名をどのようなアクセントで読めばいいか、特に地元で親しまれているアクセントをどう考えればいいのか、許容してもいいのではないかなどの点で悩んでいることがうかがえる。

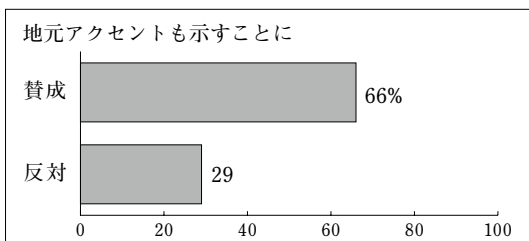
こうした悩みは、以前からあった。菅野謙・最上勝也(1981)では、当時のアクセント辞典改訂の編集方針について、東京や地方局のアナウンサーに対して行ったアンケート調査を報告している(調査は1980~81年、アナウンサー153人を対象に実施し、95%から回答を得た)。これによれば、調査では「地名については、共通語アクセントのほか、それぞれの地

元で使われている地元アクセントも示したほうがいいという意見に賛成か、反対か」という設問に対し、「賛成」が66%、「反対」が29%という結果が出た。つまり、3分の2のアナウンサーが、地元アクセントの掲載に賛成していたのである(図)。

また、このとき寄せられた「付帯意見」は、次のようなものであった。

- * 地名アクセントは原則として地元アクセントを採用すべきだと思う。もともと地名そのものが地元アクセントと共に存在するもので、切り離すほうがおかしい。むしろ「標準語」時代のオゴリのように思える。使い初めはおかしく聞えるかもしれないが、本来そうあるべきだと考える。
- * 地名アクセントなどは標準アクセントとして統一しないほうがいい。個人差、地域差があってこそ文化の香りがする。プロはプロとしてのきびしさを追求しながらも、ある程度幅のあるおおらかな部分も入れてほしいものだ。
- * 固有名詞(地名、山名、川名、寺社名)は、その土地のアクセントで発音したほうがいいのではないか。
(菅野謙・最上勝也 (1981) より)

図 地元アクセントの表示への賛否



(NHK アナウンサーを対象に実施)

出典:「これからの放送と『アクセント辞典』(1)『文研月報』(1981年10月号)

今回の改訂では、こうした点も視野に入れつつ、日本地名を数多く本編に収録するという方針で作業を進めた。NHKの旧アクセント辞典(『NHK日本語発音アクセント辞典』。1998年発行のため、以下『98年版』と呼ぶ)では、日本地名は、都道府県名や県庁所在地名などの、主なものだけが本編に載っている。巻末付録にも掲載があるが、やや使いづらい

ものであった¹⁾。

日本地名を本編に多く掲載していくという方針は、今回の改訂の柱の1つとなった。地元アクセントへの対応についても後述する。

2. 日本地名の選出

『新辞典』に載せる日本地名は、次の方針で選んだ。

【方針1】

掲載する日本地名は、3,000項目程度とする。

【方針2】

以下の日本地名はすべて載せる。

- ①都道府県名
- ②市名（東京23区の区名を含む）
- ③旧国名
- ④日本百名山

【方針3】

次のデータを参考に、上記以外の頻出の日本地名を選ぶ。

- (a) NHKの過去のニュース原稿のデータベース
- (b) スーパー大辞林3.0（三省堂）

【方針1】は、『新辞典』への掲載語の総数から逆算する形で概数を算出した。

【方針2】の①③は、日本地名の中では基本的な語であり、すでに『98年版』にも（①は本編に、③は巻末付録に）掲載されている。②も基本的な地名と考えられた。県庁所在地の市名については『98年版』にも掲載されていたが、それ以外の自治体名についても放送での頻出語は載せたいと考えた。中でも市名は基本的にどれも頻出であり、また、なるべく頻度にかかわらず平等に載せるべき対象でもあると

考え、すべて載せることにした（2014年4月現在、全国の市の数は790で、今回の掲載語にはこれに東京の23区を加えている）。

これらの地名は、「～県」「～市」という形で複合した場合の語形のアクセントについても掲載することにした。これは、県名や市名は「～県」「～市」という形で使われることが非常に多いことと、複合した場合にアクセントに迷うものがあるためである。

本来は、県や市だけでなく町村の名前もすべて掲載すべきと考えられたが、その場合は掲載する自治体名数は倍以上に膨れ上がる。このため、町村名は頻出地名に限って掲載した²⁾。

④については、日本百名山（深田久弥著の同名の著書で選ばれた国内の著名な100の山）への問い合わせが多いため、載せることにした。

【方針3】については、まず(a)によって頻出地名を洗い出した。UniDic辞書³⁾によって(a)のデータの中で地名と認識されるものを抽出し、それを頻出順に並べれば、放送に頻出の地名を選ぶことができる⁴⁾。ここで言う地名には、当然ながら、自治体名だけでなく、山、河川、湖、島、半島、湾、海などの自然地形の名前も広く含まれる。

また、同じ表記で異なる地名も数多くある（例えば「池田」という地名は大阪、北海道、徳島にある）。こうしたものは区別して数えたうえで、頻出の地名かどうかを判断した。

ただし、これだけでは、ニュース分野で頻出する地名に偏ってしまい、それ以外の分野で知られる地名が漏れることになる。このため、辞書類からも候補となる地名を選ぶことにした。辞書アプリのうち(b)は、「地名」という枠を設けているので、参考にしやすかった。上記UniDic辞書で上位にランクされるもの

だけでなく、(b)の地名についても(a)で一定数が見つければ、掲載する方向で検討した。

作業の過程で、自治体名や自然地形などの固有の地名のほかに、寺社や建築物、地名を冠した歴史上の合戦など、地名とは呼べないものの、地域に根ざした固有の名前を持つ項目も出てきた。これらは「準地名」として扱った。

最終的に掲載された項目数は、地名が3,180項目、準地名が101項目で、合計が3,281項目となった(追い込み立項したものも、別々に1項目として数えている)。

3. 語形について

都府県名および市名については、基本的には「～県」「～市」などが付いた形の語形と、それらが付かない語形の双方を載せた(「北海道」は、この語形のみを掲載)。町名と村名は、頻出の地名のみ載せるが、語形については、基本的には複合しない形で載せた(茨城県の「東海村」は、「東海」と「村」に分けて使われることはほとんどないため、複合した形で載せた)。

それ以外の地名は、作業手順上、前節「2. 日本地名の選出」【方針3】の(a)(b)の語形が基準になることが多いが、UniDic辞書を使って作業をすると、例えば「太平洋」という地名は、「太平」と「洋」という2つの要素に分けられて抽出される。これらを別々にして地名として使うことは通常はないため、実際の使われ方も検討しながら、より妥当と考えられる語形を、1語1語判断して決めていった⁵⁾。

読み方については、「全国市町村名の読み方」(NHKアナウンス室、2008年、部内資料)を参照した。そのほか、読み方にゆれのある地名については、地元の放送局や自治体に確認を

しながら判断した(表記についても、迷った場合は地元を確認した)。

4. アクセント情報の収集

4-1 基本情報

日本地名のアクセントは、以下の情報を基本的な情報として検討した。

- a. NHK アクセント辞典『98年版』
- b. 他のアクセント辞典
- c. NHK 地元放送局アナウンスグループへの調査結果
- d. 過去の放送番組の録画音声

このうち、aに掲載されたアクセントはNHKのアナウンサーが放送の際に基準としているので、実際に放送されることが多いアクセントと言える。しかし、徐々に新しいアクセントが広まっている地名も実際にはあるので、それらについて検討が必要である。

bとしては、『新明解日本語アクセント辞典第2版』(秋永一枝編、三省堂)を、主に使用した(以下『新明ア』)。ただし、同辞典は「標準的な東京アクセント」を示した辞典なので⁶⁾、それを踏まえたうえで参考にした。

cは、今回、実際にどのようなアクセントで地名が放送されているのか、当該地名のあるNHKの地元放送局のアナウンスグループに調査したものである⁷⁾。今回の改訂では全国の放送局に対し、掲載予定の地名すべてについて調査を行った。選んだ地名を都道府県ごとに分けて、当該局のアナウンスグループにアンケート形式で送り(こちらで、アクセント型をいくつか示した)、さらにその回答に

ついて電話での聞き取りをしてフォローアップを行った⁸⁾。

この調査では、「貴局が全国放送で使用する場合のアクセントをお答えください」という条件を課して尋ねた。これについては後述する。

dについては、NHKに残る過去の番組には、ナレーション等でアナウンサーが地名を読み上げているものも残っている。判断に迷う地名については、こうした過去の番組を調べて、参考情報とした(これは、検索作業が容易とは言えないので、すべての地名で行ったわけではない)。

これらa～dを基本的な情報としたうえで、NHK放送文化研究所の放送用語班で個別に検討してアクセントを決めた。その際に学術上の先行研究がある場合には、それらも参照した。

4-2 地元放送局への調査の考え方

NHKではこれまで、地名のアクセントについては、次のように位置づけてきた。

「地名のアクセントについては、全国放送では共通語アクセントを用いるが、地域放送では地元視聴者の要望が強く、地元の慣用によるアクセントを用いるほうが親しみやすいという場合には、地元アクセントを用いてもよい」ことにしています。

地名のアクセントは、その地域の慣用から生まれてきたもので尊重しなければなりません。全国の地域名を地元アクセントで発音し、放送することはかなり難しいといえます。

(『98年版』付録p11)

NHKでは、日本各地の地名(市町村・旧国名・自然地名など)を、全国放送の場合、地元の発音アクセントをそのまま用いるのではなく、共通語の発音に置き換えて放送している。全国的に見て、わかりやすく、また、放送する立場のアナウンサーが、全国の地元アクセントをすべて記憶するのは至難の業だからでもある。

しかし、地域放送では、番組担当者の判断で地元のアクセントを用いてもよいことにしている。地元の人たちにとって、地名は非常に身近なものであり、アクセントを共通語式で言われると違和感を生じる場合が少なくないからである。

(『NHKことばのハンドブック 第2版』p130)

つまり、アクセントを「共通語アクセント」と「地元アクセント」に分け、全国放送では前者を使い、地域放送では後者を使ってもよい、と位置づけている。そして、その一方で、「1.地名アクセントに対する高い要望」で紹介したように、アナウンサーからの「地元アクセント」使用の要望も強い状態である。

こうした地名アクセントの分類について、塩田雄大(2014)では、アクセントを3つに分けて説明している。具体的には、京都の「東寺(とうじ)」「(今回の改訂では「準地名」に分類される)を例に挙げ、次のようにまとめている⁹⁾。

- (ア) 伝統的な地元のアクセント
…… [ト／オ\ジ]
- (イ) その発音を元にした共通語的発音
…… [ト\ージ]
- (ウ) 共通語話者の無意識的な発音

…… [トージ]

(便宜的に、上がり目を/で示した)

塩田(2014)では、「地元のアクセントを完全に再現することは、きわめてむずかしい」としており、(ア)については、「共通語のアクセントとしてはふつう表れない」、「共通語で話しているときには、地名などの固有名詞も、共通語として無理のない形のアクセントで発音するのが自然」であるとしている。つまり、共通語を使うことにしている「放送」という場で(ア)を使うのは難しいと述べているのである。

一方、(イ)は、「地元のアクセントそのものではありませんが、共通語話者にも発音できる、地元の発音に近いアクセント」であると位置づけている。当該地名のある放送局で使われているアクセントは、(特に、全国放送で使われるアクセントと異なる場合は)この(イ)にあたると思われる。

つまり、地元で使われるアクセントは、まとめて「地元アクセント」と呼ばれる傾向がある(『98年版』の説明などもそうである)が、実際には(ア)と(イ)があり、それらは区別すべきものだと言えるだろう。そこで、今回もこれらを分けて考え、地元放送局に“放送での”地名のアクセントを尋ねることで、(ア)ではなく(イ)(あるいは(ウ))を調べることができると位置づけたのである¹⁰⁾。

ただし、先述したように、今回の調査では「貴局が全国放送で使用する場合のアクセントをお答えください」という条件も付けた。これは、仮に当該局が、ある地名のアクセントについて、「地域放送でも全国放送でも(イ)を使っている」というのであれば(イ)を答え

てもらいが、「地域放送では(イ)を、全国放送では(ウ)を使う」などと使い分けていた場合は、(ウ)だけを答えてもらう、という意味である。こうした調査は初めての試みでもあるので、地域放送だけで使われるアクセントではなく、より全国的に親しみが持たれ、違和感の少ないアクセントを選ぶのが望ましいと考え、こうした“ハードル”を設けたのである。

5. アクセントの決定

地名のアクセントは、集めた資料をもとに、放送用語班のメンバーが会議の席上で1語ずつ個別に検討し、総合的に判断して決めていった。ここでは、これまでと大きく変わった点や、新しい見解を示した点などを中心に、検討の過程と結果を報告する。

5-1 伝統的なアクセントを変えたもの

「4.アクセント情報の収集」のaやbに掲載されている地名であれば、cと照らし合わせる作業ができる。これらのアクセント型が一致していれば、それはその地名のアクセントの有力候補となる。しかし、これらが異なる場合は、どちらがよりふさわしいかを判断しなければならない。この場合、aやbではより伝統的なアクセントが示され、cではより新しいアクセントが示される傾向があると言えるだろう。

『98年版』と『新辞典』のどちらにも掲載された日本地名は875項目となったが、このうち、第1アクセントを変更したものは32項目となった。それらを掲載する。

※地名（都道府県名）[『新辞典』アクセント] ← [『98年版』アクセント] の順で記した。

※①は第1アクセント，②は第2アクセント，**地**は地元放送局アクセントを示す（地元放送局アクセントは後述する）。○囲みは母音の無声化（母音で声帯を振動させない）¹¹⁾，[カ°]などはガ行鼻音である¹²⁾。

留萌市（北海道）[ルモイ\シ] ← [ルモ\イシ]

松島（宮城）① [マツ\シマ]，② [マツシ\マ] ← ① [マツシ\マ]，② [マツ\シマ]

岩代（福島）① [イワシロ^ー]，② [イワ\シロ] ← ① [イワ\シロ]，② [イワシロ^ー]

郡山（福島）[コーリ\ヤマ] ← ① [コーリヤマ^ー]，② [コーリ\ヤマ]

水府（茨城）① [スイフ^ー]，② [ス\イフ] ← [ス\イフ]

足利（栃木）[アシカカ°^ー]，② [アシカ\カ°] ← [アシカ\カ°]

前橋（群馬）[マエ\バシ]，**地** [マエバシ^ー] ← ① [マ\エバシ]，② [マエ\バシ]

市川（千葉）① [イチ\カワ]，② [イチカ\ワ] ← [イチカ\ワ]

木場（東京）① [キバ^ー]，② [キバ\] ← [キバ\]

立川（東京）① [タチ\カワ]，② [タチカ\ワ] ← ① [タチカ\ワ]，② [タチ\カワ]

三崎（神奈川）[ミサキ^ー] ← [ミ\サキ]

由比ヶ浜（神奈川）① [ユイカ°\ハマ]，② [ユ\イカ°ハマ]

← ① [ユ\イカ°ハマ]，② [ユイカ°\ハマ]

越路（新潟）[コシジ^ー] ← ① [コ\シジ]，② [コシジ^ー]

越中（富山）① [エ\ツチュー]，② [エツチュ\ー] ← ① [エツチュ\ー]，② [エ\ツチュー]

羽咋市（石川）[ハクイ\シ] ← [ハク\イシ]

白山（石川）① [ハク\サン]，② [ハクサン]，③ [ハクサ\ン] ← [ハク\サン]

身延（山梨）① [ミノ\ブ]，② [ミノブ]，③ [ミノブ^ー] ← ① [ミノ\ブ]，② [ミノブ^ー]

諏訪（長野）① [スワ^ー]，② [ス\ワ]，**地** [スワ\] ← ① [ス\ワ]，② [スワ\]

乗鞍（岐阜）[ノリ\クラ] ← ① [ノリクラ^ー]，② [ノリ\クラ]

津島（愛知）① [ツ\シマ]，② [ツシ\マ]，**地** [ツシマ^ー] ← ① [ツシ\マ]，② [ツ\シマ]

高島（滋賀）[タカ\シマ] ← [タカシマ^ー]

水口（滋賀）[ミナ\クチ] ← ① [ミナ\クチ]，② [ミナ\クチ]

鞍馬（京都）① [クラ\マ]，② [クラマ^ー] ← [クラマ^ー]

山城（京都）① [ヤマシロ^ー]，② [ヤマ\シロ] ← ① [ヤマ\シロ]，② [ヤマシロ^ー]

摂津（大阪）① [セツ^ー]，② [セ\ツツ] ← ① [セ\ツツ]，② [セツ\]

箕面市（大阪）① [ミノ\ーシ]，② [ミノ\ーシ] ← [ミノ\ーシ]

明日香（奈良）① [ア\スカ]，② [アスカ^ー] ← ① [アスカ^ー]，② [ア\スカ]

美作（岡山）[ミマ\サカ] ← ① [ミマサカ^ー]，② [ミマ\サカ]

筑後（福岡）① [チ\クコ°]，② [チク\コ°] ← ① [チク\コ°]，② [チ\クコ°]

高島（長崎）① [タカ\シマ]，② [タカシマ^ー] ← [タカシマ^ー]

対馬（長崎）① [ツ\シマ]，② [ツシ\マ] ← ① [ツシ\マ]，② [ツ\シマ]

喜界島（鹿児島）[キカイジマ^ー] ← [キカ\イジマ]

次に、主なものについて検討内容を記す。

▼足利（栃木）

- ① [ア^シカカ° ー], ② [ア^シカ\カ°]

『98年版』も『新明ア』も、[ア^シカ\カ°]を採用しているの、伝統的アクセントはこちらだと考えられるが、宇都宮局からの回答は①[ア^シカカ° ー], ②[ア^シカ\カ°]で、検討の結果、このアクセントを採用した。

▼由比ヶ浜（神奈川県）

- ① [ユイカ° \ハマ], ② [ユ\イカ° ハマ]

『98年版』は①[ユ\イカ° ハマ], ②[ユイカ° \ハマ]で、『新明ア』も[[ユ\イカ° ハマ] (新しいアクセントとして[ユイカ° \ハマ])]として掲載され、伝統的には頭高型と考えられた。一方、横浜局では、どちらも使われるものの、①は中高型であった。このため現状では中高型が優勢と考えた¹³⁾。

▼立川（東京）

- ① [タ^チ\カワ], ② [タ^チカ\ワ]

『98年版』は①[タ^チカ\ワ], ②[タ^チ\カワ]で、逆である。『新明ア』も[タ^チカ\ワ]。これらは、[^チ]が無声化することからアクセントが置きづらくなり、[カ]に移動させた形を採用したと考えられる。しかし今回、東京アナウンス室の解答は[タ^チ\カワ]のみであった。アクセントは置きづらいものの、言えないわけでもないと考え、[^チ]にアクセントを置く形を①にした。

似たような事例としては、「市川」(千葉)があり、『98年版』『新明ア』とも[イ^チカ\ワ]だが、千葉局は[イ^チ\カワ]で、検討の結果、①[イ^チ\カワ], ②[イ^チカ\ワ]とした。「松島」(宮城)も、仙台局からは[マ^ツ\シマ]しか使

わないとの回答があり、無声化音にアクセントを置くこの形をとった。

▼身延（山梨）

- ① [ミ\ノブ], ② [ミノ\ブ], ③ [ミノブー]

これは、『98年版』では①[ミノ\ブ], ②[ミノブー], 『新明ア』でも[ミノ\ブ]である。しかし甲府局は①[ミ\ノブ], ②[ミノ\ブ]であった。検討の結果、調査結果に合わせて①頭高型, ②中高型として、平板型を③に置いた。

▼白山（石川）

- ① [ハ^ク\サン], ② [ハ\^クサン],
③ [ハ^クサ\ン]

『98年版』では[ハ\^クサン], 『新明ア』では[ハ^クサ\ン]が採用されている。これらは、無声化音にアクセントを置くのを避けた結果、『98年版』では前に移動, 『新明ア』では後に移動させていると捉えることもできる。岐阜局は[ハ^ク\サン]が出やすく、金沢局は①[ハ\^クサン], ②[ハ^ク\サン]の順で出やすいということであった。これらを考え合わせ、無声化音の[^ク]にアクセントを置く形を第1アクセントとすることにした。

▼諏訪（長野）

- ① [スワー], ② [ス\ワ], ③ [スワ\]

『98年版』も『新明ア』は①[ス\ワ], ②[スワ\]であった。長野局からの回答は[スワ\]であり、頭高型はないとのことであった。実際の放送を調べたところ、2010年代になってからの全国放送の番組で、[スワー]の使用がいくつか見つかった。頭高型は地元では違和感があることや、尾高型は全国放送では出づ

らいと考えられたこともあり、最終的に、平板型を第1アクセントにすることにした。尾高型は地元放送局アクセントとしたが、それについては後述する。

「留萌市」(北海道)、「羽咋市」(石川)、「箕面市」(大阪)については「5-3『～市』のアクセントについて」で触れる。

5-2 「地元放送局アクセント」について

5-2-1 「地元放送局アクセント」とは

今回、全国の各放送局への調査の回答と、全国的なアクセントとが異なると考えられるものが多くあった。例えば「道頓堀」(大阪)は大阪局の回答は[ドート\ンボリ]であったが、『新明ア』は[ドートンボリ^ー]である。「前橋」(群馬)は、前橋局は①[マエバシ^ー]、②[マエ\バシ]だが、『98年版』では①[マ\エバシ]、②[マエ\バシ]である。

こうしたアクセントの対立は、「より全国的に親しまれているアクセントと、より地元で親しまれているアクセントのどちらを放送で使うか」という問題であり、「1.地名アクセントに対する高い要望」で示したように、これまでもたびたび議論されてきた問題である。今回、放送用語班の中でも、どちらを辞書に掲載するか、あるいは優先させるかなどをめぐって意見が分かれ、議論が続いたが、最終的には、「地元放送局アクセント」という新たな概念を導入することで決着をみた。

「地元放送局アクセント」とは、当該の地名がある地元のNHKの放送局が、全国放送および地域放送の双方で主に使うアクセントという意味である。例えば「道頓堀」や「前橋」は、第1アクセントとしては[ドートンボリ^ー]、[マエ\バシ]を採用し、[ドート\ンボリ]や

「マエバシ^ー」は、地元放送局アクセントとして掲載した(「前橋」の頭高型は使われなくなっていると考え、今回は採用しなかった)。『新辞典』の付録1「解説編」の「IV この辞典で扱う日本地名のアクセントについて」では、地元放送局アクセントについて次のように記し、位置づけた。

これまでNHKでは、全国放送の場合は、全国的に広く使われているアクセントを用い、地域放送では、番組担当者の判断でその地域になじみのあるアクセントを用いてもよいことになってきた。一方で、全国各地にある放送局から、地域発で全国放送の番組が出される場合も多く、こうした場合はその地域でより親しまれたアクセントで地名を呼ぶことがふさわしいと判断される場合もあると考えられる。地元の人々にとって地名は非常に身近なものであるためである。この辞典で「地元放送局アクセント」を新設したのは、こうした経緯による。

この辞典の「地元放送局アクセント」とは、その地名のある地元のNHKの放送局が、全国放送および地域放送の双方で主に使うアクセントを指す。全国放送では使わず、地域放送のみで使うアクセントは含めない。

また、あくまでも地元放送局が使うアクセントであり、地元に住む人々がふだんの生活で使っているアクセントとは必ずしも一致しない。例えば、「名古屋」のアクセントは、地元に住む人々は[ナゴヤ^ー]といった平板型を使うことが多いが、地元の名古屋放送局では全国放送でも地域放送でも[ナ\ゴヤ]といった頭高型を使う。したがって、平板型の[ナゴヤ^ー]は、この辞典では地元

放送局アクセントとは呼ばず、掲載していない。

日本地名のアクセントは、第1(および第2, 第3)アクセントとして掲載したアクセントが全国的にはより広く親しまれるものと考えられるが、放送する番組の性質によっては、全国放送、地域放送を問わず、地元放送局アクセントを使うのがふさわしいと判断される場面は、あると考えられる。

(『NHK日本語発音アクセント新辞典』
付録1解説編 pp36-37)

地元放送局アクセントは、当該地域で親しまれ、その多くは大切にされているアクセントと言える。逆に言えば、地元放送局アクセントを使えば、より地元で親しまれているアクセントを話し手が選んだことが、聞き手に理解され得るものとも考える。

その意味で、地元放送局アクセントは、第2アクセントとは異なる。第2アクセントは、特段、地域性を帯びたものを採用しているわけではない¹⁴⁾。つまり、地元放送局アクセントは、第1アクセントと優劣を付けて捉えるべきものではなく、放送番組や場面に応じて、よりふさわしいアクセントを選ぶ際の参考にしてもらうためのアクセントである。つまり、それがふさわしいと考えられれば、どの放送局であっても、あるいは番組が全国放送であっても、ニュースであっても、使用して構わないものと考えている。

5-2-2「地元放送局アクセント」を付けた地名

地元放送局アクセントを設けた地名は、76項目になった。それらを以下に示す(地元放送局アクセントは地と示す)。

厚別 (北海道) [アツ\ベツ], 地 [ア\ツベツ]
厚岸 (北海道) [アッケシ], 地 [アッケ\シ]
幕別 (北海道) [マク\ベツ], 地 [マ\クベツ]
余市 (北海道) [ヨ\イチ], 地 [ヨイチ]
十和田 (青森) [ト\ワダ], 地 [トワダ]
大槌 (岩手) [オーツチ], 地 [オ\ーツチ]
角館 (秋田) [カクノ\ダテ], 地 [カクノダテ]
羽黒 (山形) [ハ\ク°ロ], 地 [ハク°ロ]
吾妻 (群馬) [アカ°ツマ], 地 [アカ°\ツマ]
伊勢崎 (群馬) [イセ\サキ], 地 [イセサキ]
太田 (群馬) [オータ], 地 [オ\ータ]
館林 (群馬) [タテバ\ヤシ], 地 [タテバヤシ]
中之条 (群馬) [ナカノ\ジョー], 地 [ナカノジョー]
長野原 (群馬) [ナカ°ノ\ハラ], 地 [ナカ°ノハラ]
前橋 (群馬) [マエ\バシ], 地 [マエバシ]
妙義 (群馬) [ミヨ\キ°], 地 [ミヨキ°]
熊谷 (埼玉) [クマ\カ°ヤ], 地 [クマカ°ヤ]
深谷 (埼玉) ① [フカ\ヤ], ② [フ\カヤ], 地 [フカヤ] ¹⁵⁾
阿賀 (新潟) [ア\カ°], 地 [アカ°]
魚沼 (新潟) [ウオヌマ], 地 [ウオ\ヌマ]
燕 (新潟) [ツバメ], 地 [ツ\バメ]
五箇山 (富山) [ゴカヤマ], 地 [ゴカ\ヤマ]
七尾 (石川) [ナナオ], 地 [ナナ\オ]
羽咋 (石川) [ハクイ], 地 [ハク\イ]
丸岡 (福井) [マルオカ], 地 [マル\オカ]
一宮 (山梨) [イチノ\ミヤ], 地 [イチノミヤ]
勝沼 (山梨) [カツ\ヌマ], 地 [カツヌマ]
清里 (山梨) [キヨ\サト], 地 [キヨサト]
韮崎 (山梨) [ニラ\サキ], 地 [ニラサキ]

伊那(長野)①[イ\ナ], ②[イナ^ー], 地[イナ\]
 飯山(長野)[イーヤマ^ー], 地[イ\ーヤマ]
 木曾(長野)[キソ^ー], 地[キソ\]
 諏訪(長野)①[スワ^ー], ②[ス\ワ], 地[スワ\]
 海津(岐阜)[カイズ^ー], 地[カ\イズ]
 笠松(岐阜)[カサ\マツ], 地[カサマツ^ー]
 新居(静岡)[アライ^ー], 地[アラ\イ]
 掛川(静岡)[カケカ[°]ワ^ー], 地[カケ\カ[°]ワ]
 函南(静岡)[カンナミ^ー], 地[カ\ンナミ]
 袋井(静岡)[フクロ\イ], 地[フク\ロイ]
 あま, 海部(愛知)①[ア\マ], ②[アマ^ー],
 地[アマ\]
 稲沢(愛知)[イナザワ^ー], 地[イナ\ザワ]
 犬山(愛知)[イヌヤマ^ー], 地[イヌ\ヤマ]
 岡崎(愛知)[オカ\ザキ], 地[オカザキ^ー]
 刈谷(愛知)[カ\リヤ], 地[カリヤ^ー]
 田原(愛知)[タ\ハラ], 地[タハラ^ー]
 知立(愛知)[チ\リュウ], 地[チリュウ\]
 津島(愛知)①[ツ\シマ], ②[ツシ\マ],
 地[ツシマ^ー]
 三河(愛知)[ミ\カワ], 地[ミカワ^ー]
 長浜(滋賀)[ナカ[°]ハマ^ー], 地[ナカ[°]\ハマ]
 守山(滋賀)[モリヤマ^ー], 地[モリ\ヤマ]
 池田(大阪)[イケダ^ー], 地[イ\ケダ]
 泉佐野(大阪)[イズミ\サノ], 地[イズミサ\ノ]
 河内(大阪)[カ\ワチ], 地[カワチ^ー]
 道頓堀(大阪)[ドートンボリ^ー],
 地[ドート\ンボリ]
 川西(兵庫)[カワ\ニシ], 地[カワニシ^ー]
 三田(兵庫)[サンダ^ー], 地[サ\ンダ]
 井原(岡山)[イバラ^ー], 地[イ\バラ]

熊野(広島)[ク\マノ], 地[クマノ^ー]
 向島(広島)[ムカイ\シマ], 地[ムカイシマ^ー]
 周南(山口)[シューナン^ー], 地[シュ\ーナン]
 那賀川(徳島)[ナカ\カ[°]ワ], 地[ナカカ[°]ワ^ー]
 観音寺(香川)[カ\ンオンジ], 地[カンオ\ンジ]
 直島(香川)[ナオシマ^ー], 地[ナオ\シマ]
 讃岐, さぬき(香川)①[サ\スキ], ②[サスキ\],
 地[サスキ^ー]
 八幡浜(愛媛)[ヤワタ\ハマ], 地[ヤワタハマ^ー]
 安芸(高知)[ア\キ], 地[アキ^ー]
 香美(高知)[カ\ミ], 地[カミ^ー]
 糸島(福岡)[イトシマ^ー], 地[イト\シマ]
 直方(福岡)[ノ[°]カ[°]タ^ー], 地[ノ\ーカ[°]タ]
 前原(福岡)[マエ\バル], 地[マ\エバル]
 一の宮(熊本)[イチノ\ミヤ], 地[イチノミヤ^ー]
 宇佐(大分)[ウ\サ], 地[ウサ^ー]
 九重(大分)[ココノエ^ー], 地[ココ\ノエ]
 中津(大分)[ナカツ^ー], 地[ナカ\ツ]
 日田(大分)[ヒ\タ], 地[ヒ\タ]
 北谷(沖縄)[チャ\タン], 地[チャタン^ー]¹⁶⁾

地方別に項目数をみると、北海道4、東北4、関東10、中部30、近畿8、中国4、四国7、九州・沖縄9で、中部地方が多くなった。また、アクセント型別にみると、頭高型15、中高型22、尾高型4、平板型35、となり、平板型が一番多かった。

以下、個別にいくつかの事例をみてる。

▼池田(大阪)[イケダ^ー], 地[イ\ケダ]
 「池田」という地名は、北海道、大阪、徳島の3つを掲載した。札幌局と徳島局の回答は[イケダ^ー]だが、大阪局は①[イ\ケダ], ②[イ

ケダ^〱]であった。『新明ア』では[イケダ^〱]だが、どの県かは示されていない。これらを考え合わせ、3つとも第1アクセントは平板型とし、大阪の「池田」にだけ地元放送局アクセントとして頭高型を設けた。

▼安芸（高知）[ア\キ], 地 [アキ^〱]

「安芸」という地名は、広島と高知の2つを掲載した。広島局からの回答は[ア\キ]だったが、高知局は[アキ^〱]であった。「安芸」は『98年版』も『新明ア』も[ア\キ]である(どの地域のものかは示されていないが、『新明ア』は「(～の国)」とあり、広島の地名は意識されていると考えられる)。検討の結果、どちらも第1アクセントを頭高型としたが、高知の「安芸」には地元放送局アクセントとして平板型を採用した。

▼伊那（長野）① [イ\ナ], ② [イナ^〱],
地 [イナ\]

▼木曾（長野）[キソ^〱], 地 [キソ\]

▼諏訪（長野）① [スワ^〱], ② [ス\ワ],
地 [スワ\]

▼あま、海部（愛知）① [ア\マ], ② [アマ^〱],
地 [アマ\]

これらは、いずれも2拍の地名で、地元の放送局が尾高型を第1アクセントかそれと同等に扱っているものである¹⁷⁾。これらは、今回は地元放送局アクセントに採用した¹⁸⁾。

5-3 「～市」のアクセントについて

『新辞典』には全国の市名をすべて載せたが、市名は「～市」のように複合した形で使われることも多いため、この語形も追い込み立項で掲載した。この場合は[〇〇\シ]のように、

地名語末にアクセントが移り、下がり目のあとに「市」が来る形が基本となる。

しかし、地名の語末に特殊拍が来た場合は、さらに1つ前の拍にアクセントが移るケースがある。これについては、各放送局への調査でも市名ごとにゆれがみられた。「同じ特殊拍+市」のアクセントが市名によってばらつくのはよくないと考え、ある程度の決まりごとを設けることにした。

5-3-1 「長音+市」の地名について

「長音+市」となる地名は48項目あった。これらは基本的には、長音にはアクセントは置かず、その1つ前の拍にアクセントを置く[〇〇\ーシ]という形にまとめた。

【例】

▼北九州市（福岡）[キタキューシュ\ーシ]

▼長岡京市（京都）[ナカ°オカキョ\ーシ]

▼飯能市（埼玉）[ハンノ\ーシ]

▼向日市（京都）[ムコ\ーシ]

【例外】

▼箕面市（大阪）① [ミノ\ーシ],

② [ミノー\シ]

「箕面市」(大阪)だけは、語の成り立ちから見て「面」に[オ]をあてて強調して読む場合もあると考え、第2アクセントとして採用した。

5-3-2 「[イ]+市」となる地名について

語末に[イ]の音があって「[イ]+市」と複合する地名については、下がり目が[イ]の前に移るかどうかが問題となった。実際の調査結果も、地名ごとにゆれが生じた。これについては、主に次の2つの点から考えた。

- (1)地名の語末が二重母音か否か
- (2)地名の漢字構成

(1)は、地名の語末の2拍に注目し、[イ]の前にどの音が来るかで、大きく次の2つに分けられると考えた。

- (A)「ア列+[イ]」「エ列+[イ]」
(例えば「堺」「小金井」)
- (B)「ウ列+[イ]」「オ列+[イ]」
(例えば「福井」「留萌」)

(A)は、前舌母音から前舌母音に移るグループ([ai]と[ei])で、(B)は後舌母音から前舌母音に移るグループ([ui]と[oi])である。

菅野謙(1971)では、アクセント辞典をもとに、外来語のアクセントが「後ろから3拍目」に置かれているかどうかを統計的に調べ、特に後ろから3拍目に特殊拍があった場合、アクセントが1つ前の「後ろから4拍目」に移るかどうかについて調べている。その結果、「特に『o+イ』『u+イ』の場合」は、「アクセントが前にずれないもの」が多いと指摘している。また、こうした前にずれないものは「『a+イ』、『o+イ』、『u+イ』という形であっても、二重母音となっていない」と位置づけている。今回もこの指摘を踏まえて、(A)(B)2つのグループに分けて考えることにした。

(2)の、地名の漢字構成は、語末の漢字が1拍のものであればアクセントが置かれやすくなり、語末の漢字が2拍以上あれば、前にずれやすくなることが考えられた。例えば、「坂井市」と「堺市」は、同じ[サカイシ]だが、両者を比較した場合、「坂井市」のほうが「井」の漢字を意識する分、[イ]にアクセントを置きや

すく、「堺市」のほうが、[イ]の前に移りやすいと考えられた。

こうしたことを踏まえて、以下のように考え方をまとめた。ただ、実際には、各放送局への調査結果も重視し、例外を設けた。

【考え方1】

原則として、第1アクセントは[～イ\シ]とする([イ]にアクセントを置き、「市」の前で落ちる)。

【考え方2】

「ア列+[イ]」と「エ列+[イ]」で終わる市名(計23項目)は、語末の漢字によって次のような違いを設ける。

- (1)市名の語末漢字が1拍のもの(計7項目)
は原則として[～イ\シ]とする。

- 【例】 甲斐市[カイ\シ]
坂井市[サカイ\シ]
桜井市[サクライ\シ]など

- 【例外】第2アクセントを設けたもの(2項目)

- 春日井市①[カスカ°イ\シ],
②[カスカ°\イシ]
- 長井市①[ナカ°イ\シ],
②[ナカ°\イシ]

- (2)市名の語末漢字が2拍と3拍のもの(計16項目)は[～\イシ]を第2アクセントに加える。

- 【例】 湖西市①[コサイ\シ],
②[コサ\イシ]
- 稚内市①[ワッカナイ\シ],
②[ワッカナ\イシ]
- 堺市①[サカイ\シ],
②[サカ\イシ]

- 【例外】仙台市[センダ\イシ]

【考え方3】

「ウ列+[イ]」と「オ列+[イ]」で終わる市名(計6項目)は、語末の漢字によって違いを設けず、「～イ\シ」を原則とする。ただし例外もある。

- 【例】 羽咋市[ハクイ\シ]
白井市[シロイ\シ]
留萌市[ルモイ\シ]

【例外】第2アクセントを設けたもの(3項目)

- 福井市①[㊦クイ\シ],
②[㊦ク\イシ]
相生市①[アイオイ\シ],
②[アイオ\イシ]
袋井市①[㊦クロイ\シ],
②[㊦クロ\イシ]

6. 日本百名山について

『日本百名山』は、深田久弥の随筆の書名である。この書籍で選ばれた100の山は放送等で取り上げられる機会が多いため、辞典に掲載することにした。したがって、100の山名の選出は、この書籍をもとにした。

6-1 語形について

百名山については、アクセントの付与よりも、語形の確定に時間を要した。語形・読み方を決めるには、過去のアクセント辞典や辞書類だけでは不十分で、ほかにも以下のサイトや資料を参考にした。

- ・「日本の山岳標高一覧(1003山)」(国土地理院ウェブサイト)
- ・「火山」(気象庁ウェブサイト「知識・解説」内)

- ・『日本百名山』(深田久弥著、新潮文庫、1978年)
- ・『日本百名山地図帳』(山と溪谷社、2008年)
- ・『日本の山1000』(山と溪谷社、1992年)
- ・『三省堂 日本山名事典 改訂版』(徳久球雄ほか編、三省堂、2011年)

これらを参照して総合的に語形を決めた。その過程では、「利尻山」(『日本百名山』では「利尻岳」)、「早池峰山」(同書では「早池峰」)など、深田の書籍とは異なるものを選んだ山もある。

語形では、語末が「山」の読み方が[サン]か[ザン]か[ヤマ]か、また「岳」が[タケ]か[ダケ]かでゆれがあるものも少なくない。このため、NHKアナウンス室の「全国市町村名の読み方」を参照し、地元放送局に確認しながら決めていったが、今回は、実際に放送されていたテレビ番組(NHKと民放)も一部、参考にした¹⁹⁾。

6-2 語形の具体例

語形をめぐってゆれのあるものについて、具体的には以下のように決めたものがある。

- ▼大雪山 [タイセツ\ザン],
許容 [ダイセツ\ザン]

北海道にある「大雪山」は、「大」が清音か濁音かでゆれがある。例えば、国土地理院のサイトには清音で出ているが、新潮社の『日本百名山』には濁音でルビがふられている。このほかの資料でも判断が分かれる。NHKでは、「全国市町村名の読み方」で「大雪山系」を[タイセツサンケー、×ダイセツ]としているなど、これまで清音を優先させている。こうした状

況を踏まえ、濁音の語形を「許容」とした²⁰⁾。ただし、「大雪山国立公園」は、環境省が濁音で定めているので、[ダイセツ\ザン・コクリツコ\ーエン]とした。

▼鳥海山 [チョーカ\イサン],
[チョーカ\イザン]

「鳥海山」は山形県と秋田県にまたがる火山で、「山」が清音か濁音かでゆれがある。資料によって判断が分かれ、国土地理院は濁音、気象庁は清音をとっている。NHKでも番組によってゆれがみられた。こうしたことから、見出しは清音にしたものの、両方の語形を並べて記し、優劣をつけない形で載せた。

7. 今後に向けて

今回の改訂では、日本地名を大幅に増やし、さらに使いやすさを考えて、すべての市名について、「～市」と複合する形も含めて掲載した。しかし一方で、町村名については、紙幅の関係ですべては載せられず、複合した形もあまり掲載できなかつた。しかし、例えば「～町」と複合する場合は、[チョー]か[マチ]かだけでなく、アクセントにもゆれがあると考えられる。次の改訂では、そうした疑問にも応える辞典になれば、利用価値も高まるだろう。

また、今回は、「地元放送局アクセント」という概念を初めて導入した。この背景には、アクセントについても、多様な価値観を認めていこうという流れがあるが、実際の放送自体がすでに多様になっていることもあると言える。全国放送と一口に言っても、東京発だけでなく、北海道発や沖縄発の番組もある。

そこで伝え手となるアナウンサーがどこにいるのか(あるいはどこに所属するのか)という情報は、番組上、とても大きな意味を持つ。それらによって、伝え手が選ぶアクセントに違いがあってもおかしいことはない。

例えば、ある土地の魅力を紹介する1つの中継番組の中で、当該の地名をめぐって、東京のアナウンサーは第1アクセントを、その土地の現場にいるアナウンサーは地元放送局アクセントをそれぞれ選んで、やりとりをするという演出があってもよいだろう。また、緊急報道では、地元放送局アクセントのほうが、その土地の視聴者に認知されやすいという場面もありうるだろう。要は、放送する番組に、どのアクセントが「ふさわしい」かである。

今回、地元放送局アクセントの調査では、「全国放送で使うアクセントを」という“ハードル”を設けて各放送局に尋ねたが、今後は、全国放送に限らず、地域放送のみで使う地元地名のアクセントに対象範囲を広げて尋ねてもよいかもしれない。民放も含め、地域放送には、地元住民に広く親しまれている地名のアクセントがある²¹⁾。それらを調査し、多様なアクセントを検討していくことは、今後いっそう必要になると考える。

(いのうえ ひろゆき)

注：

- 1) 拍数ごと、あるいは複合した語形ごとにまとめられており、中には使用頻度が必ずしも高くないものも載っていると考えられた。
- 2) 市名についても類出語に絞って掲載する方法も考えられたが、こうした公共性の高い語は、本来は地域間で差が出ないほうがよいから、市名はすべて平等に載せることにした。
- 3) 日本語テキストを単語に分割し、形態論情報を付与するための電子化辞書。
- 4) 正確に言えば、この(a)には、(a-1) NHK 放送技術研究所のデータと(a-2) NHK アーカイブスの2つがある。ベースとなるデータは同じだが、システムが異なるため、検索結果の数字が異なることがあり、今回は両方の検索結果を詳しくみて判断をした。
- 5) 山名や河川名など自然地形の名前の多くも、「～山」や「～川」などのように複合した形で使われることが多いので、出現頻度を参考にしながら、より使われる語形を選んだ。
- 6) 『新明解日本語アクセント辞典 第2版』「この辞典を使う人のために」の「1 総記」(p7)にある。
- 7) 今回の改訂では、「ある程度あらたまった場面での代表的な例となりうる発音とアクセント」を選定するにあたって、一般語についても、NHK アナウンサーに対して大規模なアクセントの調査を実施している。『新辞典』の「付録1 解説編 I この辞典で扱う発音とアクセントについて」に詳しい。
- 8) 2014年8～9月にアンケートを実施し、その後数度にわたり電話でフォローアップ調査をしている。なお、北海道内の地名は札幌局、福岡県内は福岡局に対して行った。
- 9) 『新辞典』で「東寺」は頭高型が浸透していると考え、塩田雄大(2014)の(イ)にあたる[ト\ージ]のみを採用した。
- 10) 必ずしも地元出身ではないアナウンサーが、「放送」という公共性の高い場で使うアクセントであれば、(ア)は含まれないと考えられた。
- 11) 『98年版』の日本地名は、巻末に掲載された結果、無声化記号が付けられていないものが多い。これは掲載上の制限があって付けられなかったもので、無声化のルールが変わったわけではないので、ここでは無声化記号を付けて掲載した。
- 12) 詳しくは『新辞典』「付録1 解説編 III 発音・アクセント全般について」参照。
- 13) テレビ東京のバラエティー番組『出沒! アド街ック天国』では、2016年6月25日放送分で「鎌倉 由比ガ浜」を特集した。番組中で、地元の人々はほとんどが頭高型で呼んでいることを紹介しつつ、番組では中高型で統一してこの地名を呼ぶことをことわり、ナレーション等も中高型が使われた。
- 14) 例えば「浦和」(埼玉)の[ウラワ\]は、すでに『98年版』『新明ア』でも採用されているので、地元放送局アクセントではなく、第2アクセントとした。
- 15) NHK 総合の『クローズアップ現代』の「“正しい”アクセント 誰が決める?」(2015年10月8日放送)では、「深谷」という地名について、地元では平板型で呼ぶ人が多いことが、現地取材によって伝えられていた。
- 16) 「北谷」(沖縄)は、頭高型を第1アクセント、平板型を地元放送局アクセントに採用したが、辞典発売後の2016年6月20日にOTV(沖縄テレビ放送)で放送された夕方ニュース『みんなのニュース おきCORE(コア)』の中では、地元出身のアナウンサーが伝えるコラム的なコーナーで、『新辞典』の沖縄県内の地名アクセントについて、以下のような言及がなされた。「『北谷』が[チャ]にアクセントが置かれて載っているが、地元では平板に読む。全国的にもよく出てくる『普天間』という地名は、[テ]にアクセントが載せられているが、地元では平板で読むのでは」。沖縄の地名については、沖縄出身で、NHK 沖縄放送局のキャスターの経験もある地元ケーブルテレビアナウンサーに聞き取りを行ったところ(2015年4月27日)、「『北谷』は、平板型で読む。頭高型は違和感があり、地元の民放は使わない。『普天間』は、NHKをはじめ多くの民放のアナウンサーや記者が[フテ\ンマ]を使っていると思うが、自分自身は平板型がしっくり来る。『宮古』は、[ミヤコ]。今は、どの局の天気予報も平板型で統一されている」との内容であった。
- 17) 平板型と尾高型は、助詞が続いたときに違いが出る。「木曾に」は平板型なら[キソニ]で、尾高型なら[キソ\ニ]となる。

- 18) 同様に、尾高型が関係する2拍の地名としては「木場」(東京)や佐久(長野)がある。「木場」は、調査回答は平板型だったが、『98年版』『新明ア』とも尾高型ですでに一定の広がりがあると考え、①平板型、②尾高型とした。「佐久」は長野局では尾高型は放送では使っていないとのことで①平板型、②頭高型とした。
- 19) 調査時に録画が可能だったものとして、『につぼん百名山』『グレートトラバース』『美しき日本の山々』(以上、NHK)、『絶景百名山』(フジテレビ)などの番組を録画し、確認した。
- 20) 「蔵王山」も「[ザオ\ーザン]、許容 [ザオ\ーサン]」とした。
- 21) 例えば「宮古」(沖縄)は、沖縄放送局では地域放送の場合[ミヤコ[〓]]も使う(地元民放も平板型を使用)が、全国放送の場合は[ミ\ヤコ]を使い、使い分けているので、『新辞典』には掲載しなかった。

引用文献：

- ・菅野謙 (1971) 「外来語のアクセント (2)」『文研月報』 21-1
- ・菅野謙・最上勝也 (1981) 「これからの放送と『アクセント辞典』 (1)」『文研月報』 31-10
- ・坂本充 (2009) 「『アクセント辞典』改訂への要望～現行アクセント辞典・アナウンサー全項目調査から～」『放送研究と調査』 59-2
- ・塩田雄大 (2014) 「放送用語委員会 (大阪) ことばも、ふだん着で勝負しよう。」『放送研究と調査』 64-2